

### 系図をつなぐ：屋取集落の士族系門中による系図作成の実例

武井，基晃

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

105

(発行年 / Year)

2012-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007979>

## 系図をつなぐ

— 屋取集落の士族系門中による系図作成の実例 —

武井基晃

### 一. はじめに

沖縄の士族系門中の成員たちは、どのように家譜・系図を読んでいるのか。本稿はこの問いを起点とする。門中は決して沖縄社会の基盤ではなく、研究者や門中化を受容した人々からそのような価値を与えられているにすぎないものである。しかし、現実<sup>に</sup>に門中が重要視される風潮の中、士族系の門中に属する人々は、どのように考え、ふるまうのだろうか。

現在の士族系門中の成員たちによる自身の門中に関する知識・情報をめぐる営為について現状を調査すると、それはただ読むだけにとどまっていなことがわかる。家譜の読解によって明らかになった成果を門中の内外で共有するために、新しい資料を作ること、つまり、書き残されてきたものを改

めて書き残すという行為へと展開している。そもそもなぜ門中の成員が家譜に目を通すかというところ琉球王府時代の士族の家譜は士族系門中にとつての原典だからである。その家譜および大宗の家系から枝分かれした系譜關係を把握することで、門中成員は一人一人が自身の系譜上の位置を明らかにできる。しかし、数度の分家を経た門中の下位集団や、田舎降りして首里を離れたため家譜を持つ宗家との交流が少なくなった成員の場合、自身に直接つながる系図が家譜に載っていないなかったり、大宗・小宗の系図と自身がどのようにつながるかわからなかったりすることがある。また民間の門中（百姓系門中）はもともと記録が乏しく世代深度が浅い。

こうした場合、門中の下位集団にとつては、自分たちと宗家が系譜關係上いかにつながるかを明らかにすることが大きな関心事となるが、それはつまり「家譜に載っていないことを明らかにする」ということである。そこで本稿では、門中の系図調べがどのように進んでいるか、そしてその結果明らかになったことが門中内でのどのような過程を経て事実として認定されていくかについて、士族系門中のうち屋取集落に住む下位集団の実践を事例に論じていく。下位集団が発見したことが事実と認定されるには宗家の権威や優位性が関わり、より正しい正当な知識が求められるわけだが、李鎮榮が指摘したように「正当性あるいは正統性から外れ『でたらめ』『インチキ』と判が押されている知識・事象も『社会の反映』と見なし、より柔軟に対処する必要がある<sup>6)</sup>。そうすることで門中成員は自らが属する門中に関する共通の歴史観、史的な分野の知識によって史縁的に結ばれており、必要に応じて

門中意識の高まりが図られることが改めて明らかになるだろう。

門中意識の高まりについて、大胡欽一は「戦禍による破壊からの再生に際して、著しい傾向を示した」と述べ、大戦後を門中化・系図作りの意欲が強まった時期と位置付けている。また田仲銘子は「成年男子を根こそぎにされた戦後状況は、女性の家父長的規範を一層内面化させる方向へ作用し」「戦前の男尊女卑の価値観を解消するどころか、かえって父権を高め神話化する作用」をもたらしたと指摘している。しかし戦後、民俗学や文化人類学、社会人類学が注目したのは門中化、つまり農村への門中イデオロギーの拡散と定着あるいは農村の門中が士族系門中に合流しようとする動態だった。このことを笠原政治は「門中から門中化・門中形成への関心の移行」と指摘している。<sup>12</sup>

だが、戦争は士族系門中にも壊滅的な打撃を与え、戦後になって農村で流行した系図作りは士族系門中を刺激した。本来、士族系門中は琉球王府時代の士に由来する証拠となる家譜・位牌・墓・土地財産を大宗・小宗ごとに有し、その位牌や墓に対する祖先祭祀の共同という行為によって、大家から分家を経た下位集団まで一体となっていた。そのため、下位集団にとっては祭祀行為の継続こそが証拠であり、大家と自らを結ぶ系図のような具体的な証拠の必要性は特になかった。それに対し、戦後、農村の百姓系門中は次々と系図を作成し、ときには既存の士族系門中の大家との関係を主張し、直近の系図を士族の名家や王（伝説上の王を含む）に結びつけることを始めた。こうなる、士族系門中も琉球王府時代の家譜をただ所有することだけを拠り所としてはいられない。現在を

生きる自分たち門中成員が、王府時代の家譜の記録とどうつながるのか、確かな証拠を示すことが意識され始めたのである。

その結果、士族系門中でも系譜関係の確認、拝む対象の修正（シジタダシ）はもちろん、場合によつてはより高い身分とのつながり（王の隠し子説）さえも主張されるようになった。まさに、第二の門中化とでも言うべき門中の再編成・再強化が士族系門中に意識されているのである。そこで本稿では、士族系門中の一つ洪姓門中の大宗家・小宗家・屋取の下位集団を対象とし、士族系門中の子孫自身による家譜の読まれ方、系図の作り方、シジタダシ、そして新たに明らかになった知識の認定のされ方と、それに関わる門中内の知識の権威者について考察する。

## 二．門中の歴史の連結―士の記録の活用―

### （一）屋取における系図への関心

士族系門中と百姓系門中には、お互いを比較相手と見なし、ひるがえって自分たちのあり方を見つめなおす思考法がうかがえることがある。これは両者が近接して暮らす屋取（ヤードウイ）集落に顕著である。

琉球王府時代の末期から明治時代にかけて、首里での暮らしが立ち行かなくなった琉球の士族は、

新天地を求めて間切の農村に移住した。これを田舎降りという。現在の屋取集落に住む土族系門中の成員たちはその子孫である。<sup>13</sup>この状況を門中の大宗（ウフムートウ）や小宗（ナカムートウ）の側から見てみると、門中成員たちが沖縄県各地の村々に散らばっていて、ウマチーや清明祭のときに各地から拌みに集まってくることになる。<sup>14</sup>

田舎降り以降も門中の大宗をはじめ系譜の上位にある家との関係は絶たれることなく続いてきた。特に王府時代には、屋取先の門中成員は、首里の宗家の系図の記載から漏れれば士の身分を失ってしまったため、大宗家と連絡を取り合い、苦勞して遠くの屋取集落から更新に向いていた。とはいえ数世代を経てすっかり屋取集落の住民になった世代にとつて、大宗家との関係はそれこそ家譜・系図といった記録に頼らなければわからなくなってきた。それはもはや「血のつながり」の理念に基づく関係の確認ではなく、家や門中の「歴史」の確認になっている。

明治時代になって系図座がその機能を停止し、家譜に名前が載っていることが士身分の保証となっていた時代が終わった。そして家譜に門中の全成員を記録する土族の義務もなくなった。以来、家譜の仕次ぎ（書き足し）はこれを保管している大宗とその周辺の家だけの記述に限られるようになってしまった。しかしその後も大家の持つ家譜は門中においては最上位の資料であり、その地位の正統性と権威を示すものであり続けた。そして引き続き家譜に記されていることが一門の正統な歴史として読まれることになる。

そのため、今日の屋取集落における系図調べでは、家譜の仕次ぎが停止した時代までさかのぼり、自分たち下位集団の系図と宗家の系図とを連結させなければならぬ。そのために明らかにすべきは、①田舎降り（屋取）後から当代に至るまでの来歴はいかなるものか、②宗家の家系とはどの代の誰とどのようにつながるかの二つである。このことは祖先祭祀において拝むべき家や位牌はどこかという問題と直接関わるものである。

ところが、ひとたび系図調べ・系図作りが完成すると、かえって無関心になってしまふことが見て取れる。それ以降は作られた系図を見ればわかるからである。筆者は調査中、作られた時代で止まっている系図をいくつか目にした。新しい世代の子供が生まれており、その世代の書き足しをしなければならぬと考えられながらも、つい手付かずのままほうっておかれてしまうのである。系図について考えるとき、その更新がいつの世代で止まっているのかについても注意しなければならない。

## （2）宗家の「家譜」とその公開

琉球王府時代に王府の許可を得て作成された士族家譜は、士族の門中についての一級の資料であり、大宗家が持つ正統の家譜と、王府から許されて大宗家から分立した小宗家の支流の家譜、その支流からさらに分家した家譜がある。特に元祖から始まる大宗の家譜は、下位集団に至るまで門中成員のすべてにとって系譜関係と祖先祭祀の起点となるものである。分家していない成員は系譜関係に準じて

大宗か小宗の家譜に記録されている。門中成員は全員の系譜関係が繋がりに、大宗家の元祖までさかのぼれるはずだが、様々な理由、例えば田舎降りで首里を離れ仕次ぎが滞った、家譜への正式な仕次ぎが終わった琉球王府の終焉以降に分かれた、小宗家譜など間に当たる記録が丸ごと失われたなどから、大宗家すなわち門中元祖との系譜上のつながり方がわからなくなっている成員や集団は多い。

そうした成員たちは自力で先祖がどのような系譜関係で宗家の系図につながるかを明らかにし、直近の自分たちの系図と大宗あるいは小宗の系図とを連結させなければならぬ。それができなければ、たとえ伝承や記憶、毎年祭祀行為の継続でその門中の成員であることが明らかであっても、大宗家をはじめ他の成員との系譜関係が分からないままなのである。

現在では家譜が残っている場合なら、必要に応じて手に取れる環境が整えられているが、かつてはそれも困難だった。比嘉政夫は那覇地域に住む士族（の子孫）の門中調査が進まなかった原因として家譜資料の収集が困難であることを挙げている。<sup>15</sup> 沖繩戦で家譜や元祖の位牌が焼失した門中も多く、残っていたとしても門外不出とされ門中の成員といえども直接手に取る機会はめったになかった。<sup>17</sup> そうした状況を大きく変えた要因として、複写技術（コピー機）が発達し一般に普及したことが挙げられる。コピー機での複写は筆写よりもはるかに簡単な上に、門外不出とされていた家譜の本物の筆跡を忠実に写したものを手元において置けるのである。<sup>18</sup>

印刷技術の向上と普及によって、系図資料はただ製本されるだけでなく、いかにして内容をわかり



やすく表現するかという工夫がそれぞれ凝らされるようになった。系図の体裁は①書籍型、②ポスター（貼紙）型、③掛け軸型の三タイプ<sup>19</sup>に大きく分けることができる。こうした系図が調べられ作成される中で、どのような影響が門中の系譜関係や祭祀に現れるだろうか。

### （3）洪姓門中の家譜類

洪姓門中について、宗家の系譜の扱い、屋取集落の門中成員が家譜を手に取り、その記述に直接触れる状況を見てみよう。洪姓の大宗・我如古家には、琉球王府の証明印「首里之印」が押された『洪姓家譜 正統』（各家保存分）が、戦災による焼失をまぬがれ保管されている。戦時中、宗家の我如古家の一四世が先祖の位牌と家譜だけは守ろうと抱え込んで戦火をくぐり抜けたおかげである。家譜には代々の名前、生年、父母・妻・子女の名、歴任した役職、賞罰などが「崇禎十六年癸未十二月朔日為儀者大屋子叙黄冠」というように漢文で、中国の年号を用いて記されている。

そこで、洪姓門中では『洪姓家譜 正統』や『家譜仕次』など大宗・小宗の王府時代の記録を一括してまとめ、誰でも読めるように日本語訳を施した『洪姓門中記録』が昭和三三（一九五八）年に歴史学者の協力を得て作成されている。この作成は言わば、書き残されてきたものを改めて書き残す過程である。家譜の記録は一〇世までで止まっているが、『洪姓門中記録』では大宗・我如古家については作成時の一五世まで系図を書き足してある。また『洪姓門中記録』には系図をはじめ代々の大宗

家の履歴が平易な文章で綴られており、中国の年号も西暦に改められている。そうすることで最低限度の記録（名前や生年、そして職歴など）しか記されていない『家譜』に比べ格段に読みやすいものとなっている。そのため、各地に散らばった洪姓門中の成員のうち歴史に興味ある人は『家譜』よりもこちらを好んで複製して読み、自分たちの祖先を知るための基礎資料としている。

しかし、こうした琉球王府時代の記録の読解だけでは、宗家の歴史しか分からない。そこで門中の下位集団は自分たちの直近の系図、そしてそこから小宗・大宗にまでつながる系図を作成し、系図調べの成果を公開して共有している（たとえば中城村当間の『仲松門中系図』、同村北浜の『洪姓中城北浜首里仲松門中録』など―後述）。さらに近年は、門中成員である仲松弥秀の直筆の記録も加わり、門中内において高い価値を与えられている（後述）。

### 三. 門中の系図作りと拝み先の修正

#### (1) 洪姓仲松門中の宗家と屋取の概要

以下では洪姓の屋取集落の門中の手による系図調べと系図作りについて事例を挙げていく。系図調べの過程には、従来の拝み先が正しいかどうかの確認を含み、ときには間違いがわかって修正（シジタダシ）に至ることも言及する。ここでの事例から、屋取集落の系図調べ・系図作りが、戦後の一

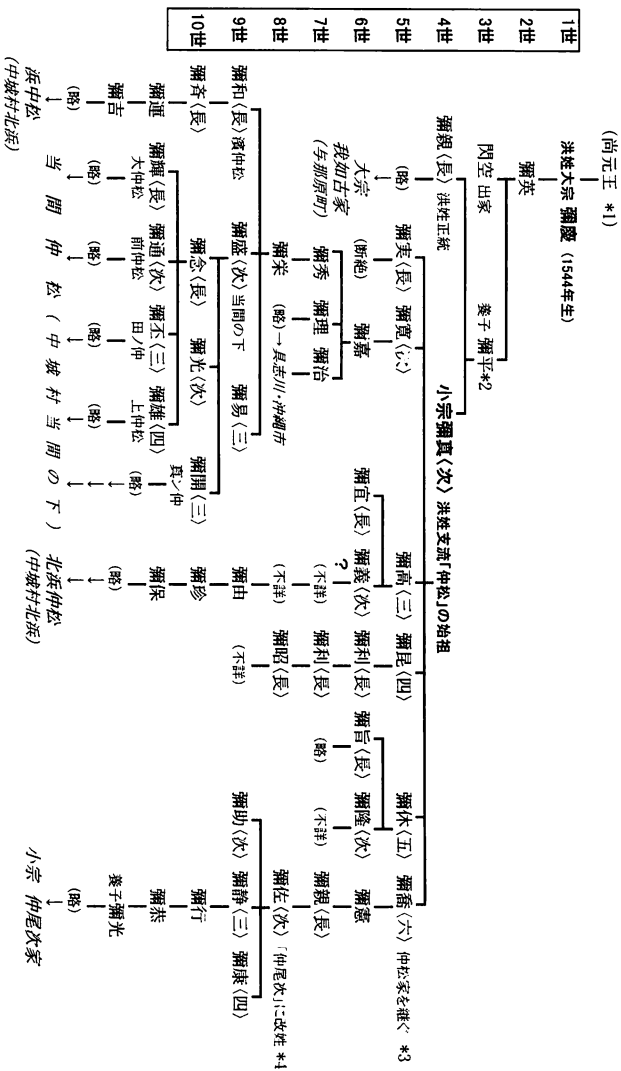
↳二世代の間に急速に進展したことがわかる。さらに屋取集落の系図調べはその成立時点を特定することと、大家家の正統の系図とつながる部分を探ることに重きが置かれていることがうかがえる。

洪姓は嘉靖二三（一五四四）年生の洪啓瑞南風原筑登之弥慶を元祖とする門中で、名乗り頭は「弥」、子孫の家名は我如古・仲尾次・仲松・玉村である。大家家の我如古家は与那原町与那原在住である。筆者が調査したのは大家家のほか、いずれも仲松を家名（現在の苗字）とする二系統の低位集団で、中城村北浜（かつての仲松屋取）および同村当間の下（高江洲屋取）に住む人々である。

これら門中の低位集団も現在では集団として「門中」と自称される。例えば洪姓門中のうち、四世弥真（三世弥平の次男）を小宗とする集団は代々の家名から仲松門中と称し、必要に応じて洪姓仲松門中と姓名を示す。さらに中城村北浜に住む仲松家のように「洪姓中城北浜首里仲松門中」と、姓・現住所（中城北浜）・当地の本家の屋号（首里仲松。首里から降りてきた仲松の意）を示すことで、低位集団として他との区別を図る場合もある。つまり門中（ムンチュウ）とは、大宗以下か小宗以下かあるいは屋取の本家以下かによらず、父系の系譜関係でつながり祖先を同じくする集団、かつ本支それぞれのレベル（分節）毎で祖先祭祀や行事の運営母体となる集団を指す語として用いられているのである。<sup>20</sup>ほかに「系統」や、近い親類を指す方言に「チュチョーデー」などがあるが、現在では門中がより正式であると人々に認識され、作成された系図などの表題にも用いられる。

洪姓の仲松門中の初代・弥真の位牌は那覇市在住の仲尾次家が小宗として管理している（系図1参

系図1 洪姓「仲松」門中系図



\*1 1528~1572年(在位=1556~1572年)。伝承上の父。  
 \*2 一子閃空が出家し家を継げなくなつたため、娘婿が継ぐ。  
 \*3 長男家に嗣子がいゝなかつたため、末弟が家を継ぐ。  
 \*4 改姓は尚泰王代(=1848~1879年。最後の琉球王)。

照)。中城村当間の下に住む仲松（以下、当間仲松）は小宗弥真の次男弥寛の系統、同北浜の仲松（以下、本稿では北浜仲松）は小宗弥真の三男弥高の系統である。弥真の子の代は仲松の系統が最も分立した世代だったため門中内で互いに自分の所属について述べるときは、この代の誰から始まる系統かに言及する。なお五世の代は末子相続により六男の弥喬に継承され、その子孫が仲尾次家（仲松から途中で改名）に当たる。以下、系図1を参照しながら、筆者が調査した洪姓門中の屋取集落の成立について整理していく。

まず、弥高の系統となる北浜仲松は、首里から当地に降りてきたことから首里仲松という屋号を名乗る本家を中心に、分家が続けて増えた家々である。首里にいたときは小宗・仲尾次家の近所（現在の首里鳥堀）に瓦葺きの屋敷があったが、沖縄の廃藩置県の明治一二（一八七九）年頃<sup>21</sup>に火事にあつたのを期に田舎降りしたと伝えられている。平成六（一九九四）年に行われた中城村和宇慶にある首里仲松の墓の調査の結果、その最も奥に納められている骨壺に、弥珍夫婦が光緒二年（一八七六年）明治九年）に父の、明治三一（一八九八）年に母の洗骨をしたと書かれていること、墓の中央に「弥珍後妻カミ」の骨壺（年代不詳）が置かれていることから、この一〇世弥珍の代に北浜（当時は津覇・和宇慶地籍内の沿岸部の開拓地）に屋取して墓を建てたと考えられるが、弥珍が父の洗骨を当地で行ったのか骨壺を持ち込んだのかは不詳である。

次に、弥寛系統から出た当間仲松は、中城村の当間の下に田舎降りし屋取集落を形成した九世の代

の次男弥盛の子孫である。弥盛の一族は屋取に際し、まず当間のムラの中でも大きな農家であったナカジョウ家（＝比嘉家。現在は二代目）のイリチリー（下働き）となって、農村での生活の術を身につけた。ナカジョウ家の居候として馬小屋の二階に住んでいた頃、ムラとは異なる仲松家の祭祀は周囲の目を引き、正月にごちそうが出たときも、まずそのごちそうを位牌に供えていた姿が珍しがられたという話が伝わっている。ムラに首里の祭祀が伝えられた当時がうかがえる話である。

そして、仲松家の人々は徐々に海岸低地を切り拓き、当間の下に高江洲屋取という集落を形成、大正八（一九一九）年の「沖縄県琉球国中頭郡中城村註記調査」（国土地理院蔵）によると高江洲屋取は二〇軒、一〇四人だった。弥盛の長男の子らが、大仲松系・前仲松系・田ノ中系・上仲松系、それらの叔父（弥盛の三男）が真ン仲系となり、それぞれの系統が家を増やしていった。現在も残っている、特に古い家とされる家は、大仲松、上仲松、上仲松小、ウドウンチ、川之下、前砂であり、これらのほとんどは海岸低地の中でも特に海沿いに位置している。王府時代の防波堤と伝えられる潮垣道（スガキミチ）や竜宮の小祠よりも下に住居を構えていることから、その土地がかつての海岸低地だったことを推し量ることができる。戦前には「第二当間」を名乗り、字（行政区）としての独立は認められないまでも、事実上の独立状態になるまでに成長した。

当間仲松を出した弥寛系統の直系である屋号・浜仲松家は、西原間切（現西原町。中城村に隣接）の海岸低地の伊保之浜で家を増やした。しかし、そこからさらに他所の屋取に移住させることが多

く、また戦時期に軍の飛行場によって土地を追われたため、今はその近辺に集落はなく、浜仲松家も北浜仲松と同じ中城村の北浜に移り住んでいる。浜仲松家の当代・仲松Aさん（昭和一六年生）によると大正二年生まれの父の代に北浜の海岸低地に来た。その当時、北浜にはすでに同名の仲松（北浜仲松）がいたが、それは同じ洪姓でも系図上離れた別系統であった。一方、同村当間の仲松家（当間仲松）は同じ系統、それどころか当間仲松から見れば浜仲松家は長男系統（チョーナンバラ）である。そのため、台風で家屋が飛ばされたときなどには当間仲松の人々が手伝いに来たり、また位牌祭祀にも来ていた。同じ洪姓の仲松ではあるが、浜仲松家にとっては同じ字北浜に住む北浜仲松よりも、同村内の少し離れた場所に住む当間仲松のほうがずっと近しい関係である。

## （2） 拝み先の修正

これら仲松家の屋取土族の門中は今日も洪姓門中の宗家である我如古家（与那原町）、そして小宗・仲尾次家（那覇市）を拝み、それらの家との系図の連結を意識している。たとえば、洪姓の支流・仲松門中についての系図をまとめた最初期のものとして昭和四（一九二九）年に編まれた『一族史研究主旨書』がある。これは、門中成員の教師・師範校生によって作成されたもので、地理学者の仲松弥秀（恩納仲松出身）も沖縄師範校生（五年生）として発起人に名を連ねている。ここには洪姓門中のうち、仲松門中の系図が当時わかった限り記されている（ただし筆者が確認したのは、それを

もとに新たにわかった久高島と宮古島に移住した仲松家の系図を加筆したもので作成時は不詳)。

このほか、既述した王府認定の家譜と『洪姓門中記録』(一九五八年)を底本とした系図調べによって、田舎降り以降の系図<sup>22)</sup>がそれぞれの門中単位に作成されている。本稿の調査地では、当間仲松の『仲松門中系図』(ポスター型。四枚からなる)が昭和五一(一九七六)年に、北浜仲松の『洪姓中城北浜首里仲松門中録』(書籍型)が平成一八(二〇〇六)年に完成している。

これらの系図作り・系図調べの段階で、それまでに実施されていた祭祀のあり方を塗り替えかねない事実が明らかとなり、実際に拝み先の修正(シジタダシ)に至ることがあった。以下ではその具体的な事例を挙げて検討を加えていく。

#### 〔事例①〕 元祖の父母

琉球王府時代の『洪姓家譜 正統』には洪姓の大宗・弥慶の父母について「父不知為何人 母不知為何人」、つまり不詳となっている。ところが戦後編まれた『洪姓門中記録』には、大正五年の易者の判断によって、琉球国王尚元王(在位Ⅱ一五五六〜七二年)が弥慶の父母であると記されている。

このことについて筆者による調査では、「ずっと知られていた事実でありながら王府時代の家譜に



は記せなかったことが王府終焉後に公に記せるようになった」というように説明される。それによると、尚元王の王世子（＝皇太子）時代のご落胤が、尚家の一員にはなれなかったものの代わりに姓の創設を許されたことが、洪姓創設の経緯である。その後、弥慶の生母は正式に側室として迎えられ、それ以降生まれた子つまり弥慶の弟妹は尚家に数えられている。<sup>(23)</sup>

また家譜によると、弥慶の孫の代（三世）で、継承上重要な記述がある。跡取りが出家し、他姓から婿養子を迎えているのである。

〔事例②―1〕 後継ぎの出家

洪姓の元祖弥慶の孫・閃空は、家譜によると万曆四二（一六一四）年、弥慶が没する四日前に出家している。

〔事例②―2〕 タチーマジクイ（他系混交）

後継ぎの閃空が出家したため、洪姓は娘婿である駱姓の春平を婿養子に迎え、名乗り頭字を洪姓の弥に改めて弥平として洪姓三世を継承させた。閃空出家から六年後、弥平が儀者の地位に就いた泰昌元（一六二〇）年を養子入りの年と仮定すると弥平は二八歳で、当時三歳の長男（洪姓四世となる弥親）が生まれていたと考えられる。次男弥真も小宗として分立するので洪氏にとって

重要な世代である。『洪姓家譜』の冒頭の「洪姓世系圖」に「壻養子彌平」と明記され、本文の「紀錄」にも「雖為實父駱氏新里子母島袋掟親雲上女思戸號雪山因彌英無嗣子為壻養子」と実父実母まで含めて養子のことが明記されている。

現在、洪姓門中内では、閃空は自らの祖父弥慶が尚元王の第一子であること、特に王位の継承権を声高に求めたために出家させられてしまったと伝承されている。これが事実かは不明であるが、結果としてタチーマジクイを引き起こした不可解な出家を説明するために繰り返されている。当該の養子は系図座設置（一六八九年）よりも七〇数年も前の出来事であり、その当時は他系の士から養子を迎えることは可能だった。<sup>24</sup> また現在のようにこれを他の血筋が混じるといって忌むこともなかった。<sup>25</sup> ところが現在では、位牌継承の禁忌の一つのタチーマジクイに当たるため、次のような判断がなされている。

〔事例③〕 現在とは真逆のシジタダシ

洪姓では血筋に即して駱姓の家系を祭祀していたが、門中内で「不慮の災難」が相次いだために大正五年に易者に依頼したところ、家筋に即して洪姓大宗弥慶、さらにはその父たる尚元王を祭祀するようになったと『洪姓門中記録』に記されている。

この大正時代の易者の判断は事例①と同じものである。現在主流となっている父系血縁を重視したシジタダシとは異なる論理であり、今のところこのときの判断を重視することで、血筋に沿ったシジタダシを拒絶している。このことは洪姓の存亡に関わる問題である。なぜなら、もし現在の流行りの規範に沿って過去のタチーマジクイを忌み、血筋に沿ったシジタダシを行って三世弥平（婿養子）の生家である駱姓を拝むとすると、弥慶を元祖とする洪姓の血筋は一六〇〇年代初頭の時点で断絶していたことになるからである。そこで、北浜仲松の仲松Bさん（昭和一五年生）のように、「大宗弥慶を拝みたい」「僕らとしてはどこまでも我如古（が本家）だ」という意見が発せられる。これは、養子を迎えて以降も琉球王府には洪姓という家があり、今日まで洪姓として立派に栄えてきた事実をふまえたものである。養子は当時において許されたことであり、それを現代においてとやかく言う必要はないという見解に落ち着いている。

このように家譜を読み、系図を調べる段階で、その時の流行りの考えに照らして間違い・禁忌とされてしまう事実が判明したとしても、それに則って拝み先を修正するかどうかは、その時々判断に任される。つまり無批判にシジタダシを受容するのではなく、現在の規範を過去にさかのぼってまで適用させることはないとする立場もありえるのである。

一方で次は、系図調べの段階で間違いがわかり、実際に拝み先の修正（シジタダシ）に至った事例である。

## 〔事例④〕 拝み先の誤解と修正―当間仲松門中―

当間の仲松門中は戦後まで小宗として中城村北浜在の浜仲松家を拝んでいた。これは浜仲松家が弥寛（小宗弥真の次男）の直系であり、「五世において長男筋が絶えてからは仲松始祖・弥真の位牌を次男筋が有しているはずだ」と考えられていたからである。ところが、この代では仲松始祖の位牌は六男筋（現在の仲尾次家）が正式に継承（いわゆる末子相続）していて、正式な小宗はその子孫である仲尾次家であった。これに気づいた後に拝み先は仲尾次家に修正された。

既述の通り、当間仲松は浜仲松家の系統から屋取集落に分かれたことも誤解を助長した。浜仲松家には弥寛の家譜（系図座の認定を受けたもの）と位牌が沖縄戦で失うまで確かにあった。だから正確には当間仲松が浜仲松家を拝むことは間違いではないのだが、「洪氏の仲松家全体の小宗」としてこの家を拝むことは誤解だった。昭和五年にできた当間の『仲松門中系図』の記述は修正以前のもので、年長者の中には今も浜仲松家を拝むべきと考えている人が多い。ちなみに同じ村に住む北浜仲松のほうはずっと仲尾次家を小宗として拝んできた。

最後に、首里に住む小宗の仲尾次家が実施した墓所の修正を紹介する。

## 〔事例⑤〕 仲尾次家の墓の分立

仲尾次家は仲松の始祖の位牌を継承する小宗だが、八世弥佐が尚泰王代に任官に際して仲松から仲尾次に家名を変え現在に至る。しかしこの改名以前に分かれた系統は仲松のまま王府の終焉を迎えたようである。最近、仲尾次家が代々管理してきた仲松家の古い墓から仲尾次の名の骨を抜き出し、別に仲尾次家の新しい墓を作った。

仲尾次家の人たちは小宗として仲松門中始祖以来の墓を拜んでいるが、そこから「自分たちの墓」として仲尾次の墓を別にしつらえたのだった。これはつまり、家系ではなく「家名」によって墓を統一させようという動きである。琉球王府時代、サムレーの家名は固定されたものではなく、任官の地名を家名にするなど折にふれて改められるものだった。それでも、唐名の姓（洪）や名乗り頭（弥）は固定されていたために特に問題は生じなかった。ところが今日において系譜の流れを追跡するには家名のつながりが重要度を増しているため、この事例のようなことが起こったのである。しかしそれでも弥真の位牌を持っている仲尾次家が仲松家の小宗であることに変わりはない。

## (3) 系図の作成と後世に見出される価値

続いて、田舎降りによって分立した士族系門中の系図調べ・系図作りの実践について、当間仲松を

例に述べていく。中城村の当間の下に高江洲屋取を形成している当間仲松の系図の編集に当たったのは、仲松Cさん（昭和一二年生）である。Cさんは一九歳から青年開発隊の農業試験場のスタッフとしてブラジルに赴き、帰国後に内地勤めや沖縄の園芸場勤めを経て、三〇代後半に中城村内で写真屋をはじめ現在にいたる。

Cさんが系図作りに従事することとなったのは、園芸場勤めの頃に門中の人たちとアガリマリーに出かけた際に年寄りから指名されたことがきっかけである。自分たちの先祖が田舎降りして以降の系図を作成し、系譜関係をさかのぼって大宗家（我如古家）所蔵の家譜に記録されている門中正統の系図にまで至るつながりを明らかにしたいという声は、当間の仲松門中でそれまでも度々上がっていた。それをついに実行に移そうと若い二人が指名されたのだが、もう一人は途中で投げ出してしまったため、Cさんがたった一人で携わることになった。「早く作れと」言うばかりで誰も手伝わない」とCさんが回想しながら苦笑するように、墓を開けて厨子甕の側書を確認するのも、位牌をばらしてその記録を見るのも、年寄りから聞き取りをするのも一人で行った。位牌や戸籍を照らし合わせる作業では当て字が多いためにたいへん苦労した。この系図調べは昭和四〇年代末から始まり、完成までの数年間は夢に見るほどにそのことはかりに熱中した。

Cさんによると開始当初はまだ若く、系図や門中といったものにそれほど関心も持っていなかった。そこで当時同じく系図調べに携わっていた具志川・沖縄両市にまたがる屋取集落の仲松門中の仲

松Dさん（昭和五年生。沖縄市在住）に調べ方を習ったり、相談に乗ってもらったりした。当間の仲松門中と具志川方面の仲松門中は同じ五世弥寛（系図1参照）の系統である。またDさんが洪姓門中の大宗家の我如古家からコピーして手元に置いていた『洪姓門中記録』をさらにコピーして参考にした。弥寛の系統は『洪姓門中記録』にも記録されているため、これによって格段に作業が進むこととなった。しかし、家譜や門中記録にある系図と、自分たちの系図がどうつながるかは自分で明らかにしなければならなかった。系図調べにおいてその過程が最も困難な部分である。

当間仲松の系図は昭和五一（一九七六）年に刊行された。印刷に入る前に、Cさんは試作品を作って当間のムートウヤ（屋号・大仲松）の屋敷の壁に貼り出して、全員（他市町村の人も）を呼び集めて各々に記述に間違いがないかを確認させた。そして完成した系図を当間仲松門中の成員の各戸主に配った。保管のための筒込みで当時の金額で総額五〇万円かかった。系図はポスター型の四枚セットからなり、そこには明治に入ってから屋取して以降に当間で分かれた各系統―当間仲松の始まりである弥盛の孫の四兄弟（大仲松・前仲松・田ノ仲・上仲松）と、四兄弟の叔父に当たる弥盛の末子（真ン仲）―の系図が示されている。

満足のいく系図ができたせいか、当間仲松では系図への熱意がいささか冷めてしまった印象を受ける。Cさんの作成した系図は門中の各家にしまっているが、完成以来三〇年を過ぎ新しい世代が生まれているにもかかわらず、系図の書き足しの動きはない。それは、系図作り以降に生まれた新しい

子・孫世代のことはまだよくわかっているからであり、つまりわからなくなることへの危機感がまだ生じていないからである。これに加え、若い世代に系図そのものの価値が見出されていないことが考えられる。

今後、こうしてしまい込まれた系図が取り出されるのはいかなるときなのか、その系図の記述が不十分と感じられるようになるのはいつか、そのとき門中の人々はどのような行動に出るのかについては、これから先の系図の研究上、重要な視点である。

#### 四、タチクチ探し―門中内の知識の権威者―

##### (1) 北浜仲松の系図調べ

前節で門中の下位集団の系図調べについて実例を挙げて述べたが、改めて本節では、系図調べの最中に明らかになったことが、門中内部で事実かどうか判断される過程について、より深く考えたい。その過程とは、屋取集落における門中の下位集団による発見が、系譜関係上の上位に当たる小宗に報告され、その長老によつて事実かどうかの判断が下されるというチェック機能である。

中城村字北浜の仲松Bさん(昭和一五年生)は分家筋の生まれであるが、北浜におけるムートウヤ―・首里仲松(首里から来た仲松の意)家とともに北浜仲松の系図調べを中心になって進めている



人である。特に定年退職してからは、Bさんに対して系図の作成を望む声が大きくなったため、それ  
にこたえて取り組んでいる。系図調べは、既述の事例と同様に①『洪姓門中記録』（平成一〇年ごろ  
に大宗の我如古家からコピーしてきたもの）を最も権威ある底本と位置づけその中の小宗弥真以降の  
世代から北浜に田舎降りした自分たちの先祖を確定すること、同時進行で②北浜仲松の各戸の現世代  
に至るまでの系図を作成することの二段階に分けて行われた。そして①と②を連結させ洪姓門中全体  
の系図・系譜関係における自分たち下位集団の正しい位置を明らかにすることを目論む。

北浜仲松の家々が小宗の仲尾次家からいつ分かれたかについては家譜の記述から欠け落ちていたた  
め不明である。北浜仲松の系図調べは、その欠落を明らかにすることを最大の目標としてきた。系図  
調べに当たってBさんは同じ洪姓門中の仲松で、同じく中城村内に田舎降りしている当間仲松の系図  
（前節参照）が、王府時代に手続きをきちんと踏んだおかげもあつてはつきりとわかつていて、すで  
に完成していることを気にかけていた。

門中の正統の歴史についてBさんは『洪姓門中記録』を読み、洪姓の初期にいわゆるタチーマジク  
イがあつたが家筋である洪姓を拝むことを徹底させることが受け入れられた事実を知った。そして、  
この家筋重視の記述をふさわしい判断として高く評価している。さらに上記のタチーマジクイや門中  
の記録に見られるチャツチウシクミ（嫡子押込）に当てはまる事例が、その当時の規範ではまだ違反  
ではなく王府の許可を得て行われていたこと、今日のシジタダシはそれよりも後の時代に成立したも

のであることを筆者の説明から知るとBさんは非常に喜んだ。というのも、これまでも門中（小宗の仲尾次家以下）の集まりでたびたび話題に上っていたこの禁忌をめぐる疑念・疑問が解消されたからである。このやり取りには、今あるかたちをそのまま貫こうとするBさんたちの志向、後年の規範で当時の規範まで塗り替える必要はないとする考え、ひいては今日流行の血筋をたどるシジタダシの拒絶が現れている。

## （2）タチクチ探し—門中の傳承と記録に則して—

北浜仲松の系図調べは最終的には、家譜に記された洪姓の大宗の我如古家から仲松家の小宗の仲尾次家に至る上位の系図と、自分たち北浜仲松の系図とを連結させることを目的としている。そうすることで、王府認定の家譜につながる洪姓門中に共有される歴史観に則して、自分たちを位置づけることができるからである。そのためには、まず北浜仲松の本家である首里仲松家が、小宗・仲尾次家の系図とどのようにつながるか、具体的には「ナカムトウ（小宗）から分家したタチクチ（初代）が系図に記された誰なのか」を確定しなければならぬ。その上で、首里仲松家の代々の系図を明らかにし、北浜仲松の各戸がいつの代に首里仲松家から分かれたのかを示せば、北浜仲松の末端の家でも洪姓門中内の位置付けが可能となるわけである。つまりは、（我如古家（洪姓大宗）↑仲尾次家（小宗）↑首里仲松家（北浜の本家）↑北浜仲松の各戸）と、系譜関係をさかのぼれるようにしたいので

ある。そしてこのうち不明なのは、首里仲松家と仲尾次家の連結だけであった。

そこで、平成六（一九九四）年、当間仲松の系図調べと同様に、家譜をよく読み系図調べを心得ている専門家としてDさんを頼ることにした。そしてDさんと沖縄市役所・教育委員会の協力を得て、中城村内にある首里仲松家の墓を開けて調査が行われた。そのときの成果は「仲松家の墓調査」という四枚つづりのプリントにまとめられている。この成果と伝承を合わせて明らかにしたのが分家から五代目かつ洪氏の系図が系図2である。墓内の厨子甕の側書から、北浜に田舎降りしたのが分家から五代目かつ洪氏元祖から数えて一〇世の代の弥珍であるという推定がなされた。記録は首里仲松家の初代には至っていないが、ここから初代が、洪氏の元祖から数えて六世の世代であることがわかった。

しかし、ここで明らかになった首里仲松家の家長の名前は大宗家の記録には載っておらず、まだ首里仲松のタチクチが誰なのかはいっこうにわからない。そこで大きな手がかりとなるのが、首里仲松家以下の北浜仲松が五世における三男の弥高の墓（那覇市内）を管理し、自分たち門中独自の行事として毎年の清明祭で北浜から近い和宇慶にある首里仲松の墓

系図2 北浜仲松の自家・首里仲松の系図

名	分家後の代数	元祖からの世数
弥由	4代	9世
弥珍 妻カミ	5代	10世
弥保 妻ウト	6代	11世
樽金 妻ウト	7代	12世
弥良 妻フジ	8代	13世
政市 妻シゲ	9代	14世

「仲松家の墓調査」（1994）を元に筆者作成

よりも先にそちらを拝み続けてきた事実である。また墓とともに弥高を祀った「高仲松」の位牌を預り元祖として北浜仲松の手で代々祭祀してきた。さらにもう一つ、五世における六男・弥喬が末子相続した小宗の仲尾次家が北浜仲松のことを「シージャー」（Ⅱ年上の兄弟）の家柄であると認めていることも重要である。

ここまで明らかにになった北浜仲松門中のタチクチに当てはまる条件を整理すると次の通りである。

条件①…首里仲松の初代は六世の代に分家した。

条件②…五世弥高を「預り元祖」とし、位牌と墓を管理している。

条件③…仲尾次家（五世における六男の系統）のシージャー（兄）の家系に属す。

以上の条件①によって、首里仲松家初代に分家が成立した代が絞られた。加えて条件③により、首里仲松家は五世の代の仲松家の六兄弟のうち五人の兄のいずれかから分かれたことも明らかになった。この条件①と③から、五世の仲松兄弟のうちの誰かの息子（Ⅱ六世）であることがわかったのである。

そして肝要なのは条件②である。弥高を「預り元祖」としているということは、弥高の長子ではないものの（もし弥高の長子ならば預り元祖にはならず、そもそも弥高本人が初代となる）、比較的縁

が近い人と考えられる。これらの諸条件から出てきた仮説を元に『洪姓門中記録』の系図を見ると、条件に当てはまる人物として三男弥高自身の次男・弥義と、五男弥休の次男・弥隆の二人が導き出された。

ここまでの先祖の確定は、Bさんと筆者による伝承や記録の整理の過程で明らかになった（平成一五年九月一日）。それからBさんの依頼を受けて、筆者がこの二人にまで絞られた仮説を門中の系図の専門家であるDさんに確認に行った。同月五日にDさんにお会いしたところ、上記の二説のうち五男弥休の次男・弥隆は家譜が琉球王府の系図座の認定を受けており、その子孫は沖縄本島の国頭に確かにいることから、北浜仲松には結び付かないことを教えられた。

この間、Bさんはこの仮説を首里仲松家の人をはじめ、ともに系図調べをしてきた北浜仲松の数人と検討し、大きな齟齬がないことを確認していた。そして筆者がDさんから得た情報を伝えた後、Bさんは同月二〇日に弥高自身の次男・弥義が首里仲松家の、ひいては北浜仲松門中のタククチ（初代）であるとの説を小宗の仲尾次家に持ち込み、判断を仰いだのだった（なお系図1にはここまでのことが反映してある）。

### (3) 門中における新事実のチェック機能

改めてその過程を時系列に並べると、〈Bさんと筆者による仮説↓『洪姓門中記録』の系図の参照

↓北浜仲松内での受容↓Dさんへの確認↓タチクチの確定↓仲尾次家（小宗）への報告」となる。ここで検討したいのは、北浜におけるムートウヤの首里仲松家、仲松門中の系図に詳しく権威とされている具志川のDさん、さらに仲松門中全体を束ねる小宗の仲尾次家といった人々にお伺いを立て、それらの承認を受けるといふチェック機能が働いている点である。

そして翌年の平成一六年九月一日、改めて那覇市首里鳥堀町在住の仲尾次家の長老・Eさん（大正五年生<sup>36</sup>）にお伺いを立てることとなった。北浜からはBさんと、首里仲松家の次男筋で現在「高仲松（＝弥高）」の位牌を自宅に祀っている仲松Fさん（昭和一六年生）が赴き、筆者もこれに同行した。結局のところ、長老Eさんによって齟齬はなく納得できるし否定する材料はないものの、従来<sup>37</sup>の系図には記されていないことから「案文でわからせるわけにはいかない」「用心しないといけない」といふ慎重な判断が下された。

以上のように、新たにわかったことが門中内において事実と認定されるためには、門中内において家譜に詳しいとされている、知識の権威者の承認を得る必要がある。特にタチクチ確定の件は、田舎降りした世代の子孫からなる現在の北浜仲松が小宗・仲尾次家といかに連結するかに関わり、ひいては洪姓門中の元祖とどのようにつながるかという、門中の下位集団の根幹に関わる問題への答えである。家譜に載っていないことを明らかにする作業であるため、正当かつ正統な知識として、ますます小宗の承認は不可欠となってくる。

大宗や小宗は、元祖の位牌や家譜などの管理者として、祭祀上の権威以外に、正統的な知識の権威者という役割を担っている。北浜のタクチ探しにおいて小宗の長老の認定が強く求められたこともここに由来する。さらに、田舎降り先の屋取集落に住む門中の下位集団においては系図調べの中心となつている人も家譜などを読みこなすことによつてやはり知識において権威者となつていき、記録や年寄りから聞き伝えた伝承に即して、あくまでも慎重に知識を収斂させていく。こうして彼らが得た納得しうる新事実をふまえながら、各地域や門中内の各集団の歴史が再構築されていくのである。

その後、平成一七年四月の清明祭の日、那覇市内の弥高の墓前に北浜仲松の大多数が集まつた場で、これまでの系図調べの成果が責任者のBさんによつて報告された。それに対し北浜仲松の最年長者Gさん（大正三年生）が領いたことで全員が拍手をして承認された。同月中にもう一度仲尾次家のEさんを訪ねて意見を伺つてから、Bさんは平成一八年に『洪姓中城北浜首里仲松門中録』を完成させた。そこには弥高の件も「仮説」として言及されている。しかしながら系図調べはそう簡明にはすまない。実は北浜仲松には弥高（五世三男）の弟・弥昆（五世四男）の位牌ともつながるといふ伝承が残っている。これについては伝承以上の証拠はないものの根強く、完成された門中録の系図では結局、家筋と位牌の継承が混同され首里仲松家は弥昆の家筋、弥高の位牌を現在預かつている家（高仲松）は弥高の家筋の養子につながると記されている。それは、門中録の編纂に当たつたBさんが、従来の伝承も新仮説もわかつたことは漏れなくすべて書き残すことを目指したからである。<sup>27</sup>

## 五・仲松弥秀の直筆の記録

門中内において門中の知識について権威あるいは責任を持つとされる人として、家譜や位牌を有する人、家譜などを読み込んで内容を理解している人を挙げてきたが、洪姓門中にはそれ以外に一人、知識の権威者と位置付けられる人物がいる。

それは、恩納仲松の出身で、師範学校を卒業し琉球大学の教授になった仲松弥秀である。恩納仲松は洪氏門中のうち仲松門中の次男弥寛の系統に属し、当間仲松から分かれて恩納村へ屋取した家々の子孫である。そのため仲松弥秀は琉球大学在職中、学生たちを中城村北浜に住む弥寛系統の直系の子孫・浜仲松家に連れて行き、位牌祭祀を見学させていた。また既述の通り、仲松弥秀は師範学生時代に仲松の系図調べに参加している。

洪氏門中や仲松門中の人たちは門中の系図を明らかにするように度々要請していたが、仲松弥秀はその都度、地理学や御嶽の研究が専攻であること、そして自身の属する恩納仲松は分かれのさらに分かれの門中であるため上の方の系図のことはわからないと拒み続けてきた。しかし、晩年の平成一三(二〇〇一)年(仲松弥秀は平成一八年没)に直筆の記録を著し、大宗の我如古家に提出している(写真1)。そこには、家譜では不詳となっている洪氏の初代弥慶の父母が尚元王とその夫人であるこ



と、それゆえに三世閃空が僧籍に入れられたことが記されている。

実のところこれらは門中の内部で語り継がれてきたこと（事例①～③）を、仲松弥秀がただそのまま書き連ねただけのものである。ところが洪姓門中にとっては、言い伝えに過ぎなかつたことに対し、仲松弥秀先生のお墨付きを得られたものとして読まれ、小冊子にまとめられて

関係者に配布されている。山原の屋取から苦学して琉球大学の教授になった仲松弥秀の直筆の資料という存在は、情報源は洪氏門中内部に元からあったもの—家譜記録や言い伝え—であるにもかかわらず、門中外部の大学教育という知識体系に属するものであるかのように位置付けられて読まれている。

六. おわりに

琉球王府時代の士族の家譜や、そこから派生・再編された諸記録が門中内でいかに読まれている

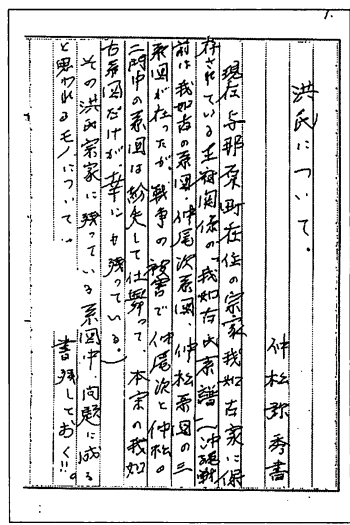


写真1 仲松弥秀直筆

か、それらを元に系図調べや系図作りがどのように進んでいるか、門中内の知識はどのように管理され、知識の権威者はどのように関わるかについて、士族系門中の一つ洪氏門中の大宗・小宗、そして屋取（ヤードウイ）集落に住む門中の下位集団を対象に論じた。

系図作りは、特に門中の下位集団にとって、自分たちの系図が大宗・小宗の系図とどのようにつながるかを明らかにすることが目的である。それはつまり、大宗家初代の元祖から現在の門中成員の一人一人までの系譜関係がいかにつながるかということであり、祖先祭祀においてどの祖先を拜むべきなのかという問題にも直結する。それゆえ、系図調べの過程で、祖先祭祀の対象の再検証や修正が併せて行われることもある。ただしその際に、流行りのシジタダシの規範に無批判に従うかというところではなく、個々の事情に応じて判断される。特に、琉球王府時代の継承に対して現在流行りの継承の規範を当てはめると大きな混乱を生じさせる。王府時代の家譜を有する士族系門中は過去の継承を明らかにしやすいのだが、そのことは長所であると同時に、禁忌に当てはまるとされる継承が発見されて問題視されやすいという短所もはらんでいる。本稿の事例では大宗や小宗の地位も一時期疑われたが、門中成員にとって納得のいく結論が選択されている。

門中の下位集団の系図作りは、自分たちの門中についての記録が何もないことに失望することから始まる。家譜などの系図に載っていないことを明らかにするために系図調べを始めるわけである。その一方で、完成してしまえば系図調べに対する熱意は失われ、それ以降の書き足しも積極的には行わ

れない傾向を本稿では指摘した。系図が後代にどうつながれていくのか、つまり、しまい込まれた系図がまた取り出され、その記述が不十分と感じられたとき、人々がどのような行動に出るのかは、今後の系図研究上重要な課題である。

また本稿では、系図調べによって新たに明らかになったことが門中内で事実かどうか判断される過程を追跡した。その際には門中内（本稿の事例では小宗以下）で家譜や系譜関係に詳しいとされる複数の知識の権威者によるチェックと承認が必要であり、充分慎重に判断されていることを示した。一方で完成した家譜には齟齬があっても伝わっていることをできる限り文字として書き残そうとする配慮も見られた。これもまた系譜関係について多くの情報を集約する系図調べの責任者が門中の末端における知識の権威者として期待される役割の一つである。さらに、大学教授・仲松弥秀が自ら属する洪氏門中の大宗家に関する伝承を改めて直筆で著した新資料の読まれ方からも、門中内の知識の権威について考察することができた。その意味では、門中の資料に目を通し、多くの関係者から話を聞いている筆者を含む民俗学をはじめとする研究者という存在も、門中の人々にとっては門中の内・外の知識体系を結ぶ存在に他ならないわけで、考察の対象とすべきである。このことについては今後も課題として考えていきたい。

## 【註】

(1) 玉城毅、一九九九、「沖繩の門中と出自—門中研究の反省と課題—」『沖繩民俗研究』一九、四三頁。「門中が集団としてあまり社会的機能を持たず、一部の地域に偏って存在しているにも関わらず、クロージアアップされすぎて、門中が沖繩の社会構造の特徴だと印象を植え付けるような弊害を伴っていた」。

(2) 渡邊欣雄は「沖繩の人びとが脳裡にえがいている『ムンチュウ（門中）』は、はじめから人類学者が勝手気ままに翻訳した（親族関係）でも（出自集団）そのものでもない」とし「民俗概念としての『ムンチュウ（門中）』のすべてを包括的に対象とする必要」を指摘している。渡邊欣雄、一九九〇、「民俗知識論の課題—沖繩の知識人類学」凱風社、一七三頁。また、李鎮榮も沖繩本島北部において「『門中』がもつとも顕在化するの、筆者のような外部からの研究者に『説明のために用いられる』時である」としている。李鎮榮、一九九五、「沖繩における伝統の創造の一面—『門中』と系図の生成を中心に」『沖繩民俗研究』一五、一四—一五頁。

(3) 小熊誠、二〇〇一、「記録された系譜と記憶された系譜—沖繩における門中組織のヴァリエーション—」筑波大学民俗学研究室編『都市と境界の民俗』吉川弘文館。

(4) 安和守茂は沖繩の門中系図について「門中の世界の全体像が可視的に表現されている」、「門中系図の作成は、その基盤となった思考様式が系図に具現化された」、「門中の世界を彩る中心的内容」、「広大な想像力の世界を内蔵」、「門中はこうした系図の作成を一つの大きな媒介要因に完成していった社会的現象」と表

現した。安和守茂、一九九八、「沖繩の『門中化』の一断面」『ソシオロジ』四二―三、九四―九五頁。

(5) 小田亮、一九八七、「沖繩の『門中化』と知識の不均衡配分―沖繩本島北部・塩谷の事例考察―」『民族学研究』五一―④。

(6) 李前掲。同稿で李は、研究者からは無視されがちな「インチキ臭い」系図であっても「系図作成の依頼即ち『需要と供給』がこの沖繩社会で成り立っている」(二三頁)ことを評価している。それを「捏造」ととらえず肯定的に「伝統の発生」(一二頁)ととらえることで広がる可能性についても提案している。

(7) 武井基晃、二〇〇七、「伝承行為としての歴史観の修正とその必要性―沖繩本島におけるムラ・ヤードウイ両集落の関係を事例に―」『日本民俗学』二五一、九〇頁。「史縁とは様々な関係を、現時点で観察できるものだけでなく、現状に至るまでの歴史的経過に基づいて把握しようとする観点から見出される。それは歴史に関心を寄せる社会であるほど強く意識される」。「史縁とは、連続と続く歴史のある一断面のみを、意図的に強調する思考法である。それは当事者たちが育んできた歴史観の産物でもある」。

(8) 大胡欽一、一九七二、「琉球士族門中の構造―清明祭を中心として―」『政経論叢』四一五・六、一三〇頁。

(9) 田仲銘子、二〇〇四、「沖繩の位牌継承と女性問題―父系血縁イデオロギーの歴史的形成過程を通して―」『沖繩文化研究』三〇、三一六―三二七頁。

(10) かつて士族の門中制度をもとに農村において百姓系の門中が形成される門中化現象が起きたのだが、今では百姓系門中の成立が実は新しいという事実はほぼ忘れ去られ、先祖の身分・位階によらず門中はあつて

当然と考えられている。

- (11) 常見純一、一九六五、「国頭村安波における門中制度の変遷」東京都立大学南西諸島研究委員会（代表古野清人）編『沖繩の社会と宗教』。山路勝彦、一九六七、「沖繩・渡名喜島の門中についての予備的報告」『日本民俗学』五四。山路勝彦、一九六八、「沖繩小離島村落における〈門中〉形成の動態―粟国島における父系親族体系としての〈門中〉の若干の考察―」『民族学研究』三三一。小川徹、一九七一、「沖繩民俗社会における『門中』（仮説的総括）」『日本民俗学』七四。小川徹、一九七二、「百姓門中における清明祭受容の一事例―『家風祭典』の紹介―」『日本民俗学』七九。比嘉政夫、一九七四、「門中」研究をめぐる諸問題―小川徹氏の論考を中心に―」外間守善編『沖繩文化研究』一、法政大学沖繩文化研究所。小田前掲など。
- (12) 笠原政治、一九八九、「沖繩離島社会の門中再考」『日本民俗学』一七八、一頁。
- (13) 武井前掲、および武井基晃、二〇〇九、「屋取における土族系門中の現状―『田舎降り』と『門中化』の対称性―」『沖繩民俗研究』二七。
- (14) その意味では門中成員は日本各地、世界各地に広まっている。ただしそうした家はウマチーや清明祭のときには来られない場合が多い。これに対し、県内ならば行事のたびに集まることが可能である。昨今の自動車化した生活ならばなおのこと容易である。
- (15) 比嘉政夫、一九八三、『沖繩の門中と村落祭祀』三一書房、五二頁。もう一つの原因としては、土族門中は

地域的に区切って分析できない上に門中成員も多く全体像がとらえられないことが挙げられている。

- (16) 白鳥芳郎、一九六八、「沖繩本島に残存する家譜―沖繩調査ノートと資料―」『上智史学』二三、五五頁に、一九六六―六七年に沖繩で士族門中の家譜研究を試みた白鳥が「家譜を探そうという私の計画を、殆ど誰も信じてくれなかった。焦土と化した沖繩本島にそんなものは残っている筈はない」、「いざそれを見せて貰いたいと願うと、門外不出の系図を他人に見せることは出来ない」と断られてしまった」と当時の調査の困難さが記されている。

- (17) 中山良彦、一九七七年一月一七日、「栢姓門中のルーツ 家譜を内面化する人びと」『沖繩タイムス』記事には、昭和三八（一九六三）年にそれまで門外不出だった宗家所有の家譜を出版し配布したときのことについて「門中の人たちが自分らの家譜の内容を知ったのは、この時が始めてであった」という記述がある。

- (18) 武井基晃、二〇〇七、「歴史調べ活動による伝承の収斂―伝承者の好奇心を事例に―」『民俗学論叢』二二。本稿に登場する仲松Dさん（引用文献ではEさん）は栢姓門中の『家譜』の複写を所有している。市役所職員だったDさんはコピー機が存在を早くから知り、昭和五〇（一九七五）年に我如古家から家譜を借りて三部の複製を作った。一部は家譜とともに我如古家に渡され閲覧用に用いられ、門中成員が家譜を手にとることを可能にした。また一部を沖繩市の教育委員会に歴史資料として提供し、残る一部をDさん自らが所有した。

(19) 書籍型は手に取りやすいが、系図が頁をまたがる時のレイアウトが難しい。その点、ポスター（貼紙）型は系図を大きく表記でき、複数枚に分けることも可能である。たいてい丸めて保管され中身を見るときに広げられるため、保管用の筒代が別途かかる。掛け軸型は書籍型と同様見栄えが良いが、見開き一枚に系図を納めなければならない。

(20) 比嘉春潮、一九五二、「首里の門中と祭祀」『民間傳承』一六一―五は、向氏を例に「これらの家々は向氏の一門ではあるが、直ちに向氏門中とは云えない。向氏は沢山の門中に分かれているのである。（一門と門中とはよく同義語として使われているが、その間に幾らかのニュアンスがある）」と複数の門中の総体としての一門という語意を提示した。また小川徹、一九八七、「史料からみた門中の歴史」『近世沖縄の民俗史』、弘文堂は「系図座規模帳制定後から『一門』、『親類』、『與中』が公用語の基本」で「士族門中制においては、『門中』の語は公用語としては終始登場しなかった」。「系図に登録された父系血族を士層では一門と称した」のだが、「門中」も公用以外の文書に見られることから「門中」なる称呼は、近世末に至って、通俗的通用語として普及した」と結論づけている。

(21) 田里友哲、一九八三、『論集 沖縄の集落研究』離宇宙社、五六―五七頁は慶藩置県から土地整理までの時期（明治二二―三二年）を「屋取の発達期」としている。

(22) こうした資料には、歴史の専門家として比嘉寿助（歴史学者…本稿の事例では『洪姓門中記録』に関与）、林清国（歴史学者…当間の『仲松門中系図』に関与）などが関わり、専門知識や技術を提供すると同時に、



出来上がった資料の権威を高め、その内容を保証する役割を負っている。その際、学術的な技術と霊的能力が不可分なときがままある。つまり民間宗教者と同質の知識と技術が求められ、実際に易者を兼ねる系図屋も多い。系図制作者については李前掲でも詳しく報告されている。筆者自身も家譜や系図を読み込んだ上で指摘したことを、靈感によるものと評価された経験がある。

(23) ここには、尚元王の長男に生まれながら庶子であるため王位には弟(尚英王)が就いた実在の人物・尚康伯の生い立ちが混在している。

(24) 渡口真清、一九七〇、『麻氏兄弟たち』限定版によると、系図座設立によって家譜の管理が徹底されるようになった過渡期において、家譜の価値が社会的に認知されるとともに父系の系譜関係が重視されるようになった。つまりそれ以前は養子のやり取りも系譜関係に縛られることなく、比較的ゆるやかに行われていた。

(25) 系図座設立以前になされた他の父系の混入は、後の時代にタチーマジクイの禁忌として取りざたされるようになった。先祖の時代の継承を子孫が問題視し、シジタダシに至った事例については渡名喜明によって論じられている。渡名喜明、一九九二、「士族門中とシジタダシ―渡名喜門中の場合―」『ひと・もの・この文化論』沖縄タイムス社。しかし本稿の事例では似通った状況に置かれながらもシジタダシには至っていない。その違いは門中成員が祖先祭祀や系譜に関してその時代毎に何を重視するかの差であろう。

(26) 仲尾次Eさんは小宗仲尾次家の五男で、小宗は兄の子孫が継いでいるが、年長者であり、また子供のころ

から門中のことを興味深く見聞きしていたので長老とされている。その父（慶応二年生）は小宗仲尾次家の分家筋の生まれだが、養子入りし小宗を継いだ。

(27) 瀬川昌久、一九九六、「族譜と歴史意識」『族譜 華南漢族の宗族・風水・移住』風響社、一九―三九頁。

瀬川によると、中国の宗族の族譜においても「編纂者による解釈や判断を多分に含んだものである可能性」、「後日の分節間関係や宗族の団結維持に配慮した系譜の再解釈がなされている可能性」は無視できず、「比較的新しい層、中間層、古層それぞれについてその編纂過程」で「仮構性が入り込む可能性」がある。

(28) 瀬川前掲はテキストの読み手、解釈者として「族譜編纂者である一族の知識人」、「長老」、「一家の家長」、そして「プロの歴史家や人類学者たち」を挙げている。